The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響
Author(s)	石井, 国雄; 沼崎, 誠
Citation	対人社会心理学研究. 2012, 12, p. 67-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5074
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響 1)

石井国雄(首都大学東京大学院人文科学研究科)
沼崎　誠(首都大学東京大学院人文科学研究科)

本研究は自己価値が脅かされた男性において、女性に対する潜在的偏見が強く生じるかを検討した。事前にローゼンバーグの自尊心尺度に回答した男性参加者は、知的テストとパーソナリティ・テストのネガティブ・フィードバックを受けたか、あるいは受けなかった。その後、参加者は女性とネガティブ評価概念との連合強度を測定するシングルカテゴリIATを行った。結果として、高い自尊心をもつ男性参加者において、ネガティブ・フィードバック条件のほうがフィードバックなし条件よりも、女性とネガティブ評価概念とを強く結びつけていた。この結果は、男性は自己価値が脅かされた場合に、女性の評価を下げたり蔑視したりすることで、自己価値を回復させようとすることを示唆している。

キーワード: 潜在的偏見、女性に対する偏見、自己価値への脅威、顕在的自尊心、シングルカテゴリIAT

問題

近年の平等主義的な風潮から、男女間の偏見や差別は以前より強くは感じられなくなり、あからさまな形では表明されることは少なくなってきている。しかし、依然として男女間の偏見や差別の問題は根深いと考えられる。本研究は、男性は自らの価値が脅かされた場合に、女性を否定的に評価し得ることを示そうとするものである。特に潜在的偏見に注目し、自己価値が脅威にさらされた男性において、非意識的に女性とネガティブ評価概念を結びつける反応が強まるかを検討した。

偏見の自己高揚機能

集団間態度の文脈においては、偏見は外集団に向けられた否定的な態度のことをさす(Dovidio & Gaertner, 1986)。偏見は外集団の価値を貶めることであるが、そればかりでなく外集団の価値と比較して内集団の価値を高揚させることにもつながる。このように偏見は集団の価値に関わるものであるが、偏見は当該の集団と関わる人にとっては自己価値の高揚感をももたらす(Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2003)。例えば、自分が所属している内集団が外集団よりも優れていると感じたり、価値が劣る外集団が存在していると感じたりすれば、その集団の価値を自己に反映させることで、自己価値が高いと感じることができる。

偏見が自己高揚的な機能をもつ証拠として、自己価値への脅威状況において、偏見が強く生じるということがある。人は自己高揚動機をもつために、自己価値が高く維持されることを望むが、場合によっては、自己価値が脅かされ、高い自己価値の維持が困難な場合もある(テストで上手くいかなかった、他者から拒絶された、自分の魅力がないと感じた)。自己価値への脅威にさらされると、強い不快感が生じるため、人は脅威に対処し、自己価値を回復させるための行動に動機づけられる。自己価値への脅威状況において、外集団の偏見がより生じるようになり、そして偏見を用いることが自己価値の回復につながるならば、偏見は自己高揚機能をもっているといえるだろう。実際に、先行研究は脅威下において偏見が強まることを示している(Crocker, Thompson, McGraw, & Ingerman, 1987; Taylor & Lobel, 1989)。Fein & Spencer (1997)は、参加者にテストのネガティブな結果をフィードバックすることで自己価値に脅威を与え、その後にマイノリティ外集団(ゲイ男性、ユダヤ人)の成員に対する顕在的評価をさせた。結果として、脅威にさらされた参加者において、脅威にさらされていない参加者と比べて、それらマイノリティ外集団成員への評価がより否定的となる傾向がみられた。そして重要なことに、脅威を受けた参加者においては、外集団への偏見の度合いと状態自尊心の程度とに関係があり、外集団成員をより否定的に評価した人において状態自尊心が回復することがみられた。こうした結果は、外集団を否定的に評価することが脅威下においては、自己価値の高揚につながることを示している。

脅威下における潜在的偏見

先行研究では主に意識的に表される偏見、すなわち顕在的偏見が扱われることが多かったが、近年では、顕在的偏見の背景に生じる潜在的偏見が注目されている(Greenwald & Banaji, 1995)。潜在的偏見とは、質問紙測度などの顕在測度では捉えにくい、評価概念の活性化などのような非意識的な偏見反応のことをさす。特にここでは、外集団とネガティブ評価概念が結びつけられる反応を潜在的偏見として議論する。潜在的偏見が注目されてきている理由としては、潜在的偏見の発生が顕在的偏見に先立ち、かつ顕在的偏見に重要な影響を与えていると考えられることからくる。ある事物との接触は、記憶において当該の事物と結びつけられた評価的概念を自動的に活性化させる(Bargh, Chaiken, Govender, &

Pratto, 1992; Fazio, Sanbonmatsu, Powell, & Kardes, 1986)。もしある外集団が記憶においてネガティブ評価概念と結びつけられているならば、外集団成員との接触は、ネガティブ評価概念を自動的に活性化させる(Devine, 1989)。活性化は外集団との接触によって自動的かつ急速に生じるものであり、後続に生じる顕在的偏見や差別的行動の発生に強く関わる(Amodio & Devine, 2006; Petty, Fazio, & Briñol, 2009)。このように顕在的偏見が生じるプロセスを考える上で、潜在的偏見は重要な役割を果たすといえる。

いくつかの研究は、自己価値への脅威下においては、潜在的偏見が強まることを示している(石井・沼崎, 2011; Sinclair & Kunda, 1999; Spencer, Fein, Wolf, Fong, & Dunn, 1998)。Spencer et al.(1998)は、脅威を受けた参加者に、マイノリティの外集団（アジア人女性、黒人）をプライムし、その後の単語完成課題において外集団のネガティブなステレオタイプ関連語がどの程度作られたかを測定した。その結果、脅威を受けた参加者においてネガティブなステレオタイプ関連語がより多く作られていた。これは、脅威下において、外集団に関連した刺激の呈示によって、ステレオタイプ的ネガティブ評価概念が活性化したためだと考えられる。こうして脅威下において潜在的偏見が強まることによって、外集団に対する否定的な顕在的評価が生じやすくなるのだと考えられる。

本研究は、潜在測度としてシングルカテゴリIAT(Karpinski & Steinman, 2006: シングルカテゴリIAT の説明については後述)を用い、自己価値への脅威下において潜在的偏見が強く生じるかを検討した。

脅威下における女性に対する潜在的偏見

本研究は、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性に対する潜在的偏見が生じるかを検討した。男性における女性に対する偏見を扱ったのは、自己価値が脅威にさらされていない状況においては否定的な潜在的態度が生じない外集団に対しても、脅威下においては否定的な潜在的態度が生じるようになるかを明らかにするためである。ここまでの議論では外集団と一括りにしてきたが、さまざまな集団関係においては、嫌悪的な評価が向けられやすい外集団もあれば、好意的な評価が向けられやすい外集団もある。脅威と潜在的偏見を扱った先行研究においては、マイノリティ集団のような、歴史的に蔑視の対象であり、社会的に否定的な価値を付与される集団（黒人、ゲイ男性、ユダヤ人女性）が扱われてきた(Sinclair & Kunda, 1999; Spencer et al., 1998)。そうしたマイノリティ集団に対しては、脅威にさらされていない状況においても潜在的偏見が生じやすいことが示されている(Jost, Pelham, & Carvallo, 2002; Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002)。この点を考えると、先行研究はもともと潜在的偏見が生じやすい外集団を扱い、そうした外集団への潜在的偏見が脅威下においてさらに強まることを示してきたといえる。

ならば、もともと潜在的偏見がそれほど強く生じにくい外集団に対しても、脅威下においては強い潜在的偏見が生じるようになるのだろうか。潜在的偏見がそれほど強くもたれない外集団として、男性における女性という外集団が考えられる。男女に関する潜在的偏見を扱ったいくつかの研究は、少なくとも自己価値が脅威にさらされていない男性において、女性をネガティブ評価概念と結びつける潜在的偏見が生じにくいことを指摘している(石井・沼崎, 2009; Rudman & Goodwin, 2004)。Rudman & Goodwin(2004)は、男女を参加者とし、IAT(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)を用い男女カテゴリと一般的なポジティブ、ネガティブ評価概念との結びつきを検討した。その結果、同性よりも異性とネガティブ評価概念を結びつける内集団バイアスは、男性参加者のほうが女性参加者より弱いことが一貫した結果として示された。また重要なことに、内集団バイアスを示す IAT 効果の効果量は、男性において概して小さく、有意な効果がみられないこともあった。石井・沼崎(2009, 研究 1)は、日本においても同様に男性は女性よりも内集団バイアスの傾向が弱いこと、男性において内集団バイアスを示す有意な効果はみられないことを示している。このように内集団バイアスが弱い理由として、Rudman & Goodwin(2004)は、男性は記憶において、女性を母親イメージや異性と結びつけ、また同性である男性を脅威と結びつけているために、男女に関する潜在的態度の内集団バイアスが生じにくいことを示している。これらの結果は、あくまで男性への評価と女性への評価との相対的な差として、女性にネガティブ評価概念を結びつけにくいということを示すものである。しかし、マイノリティ外集団への潜在的偏見と比べると、脅威にさらされていないとき、男性は女性に対してはそれほど強い潜在的偏見をもたないことを示唆する結果であるといえよう。

ならば、自己価値への脅威下においては、女性に対する潜在的偏見はどのようになるだろうか。石井・沼崎(2011)は、男性を参加者とし、自己価値への脅威下における、男女に関する潜在的態度の内集団バイアスを検討している。彼らは、参加者にテスト結果のネガティブ・フィードバックを与えることによって脅威を操作し、その後、IAT によって潜在的態度を測定した。その結果、脅威下におかれた男性において、男性をポジティブ評価概念と結びつけ、女性をネガティブ評価概念と結びつける内集団バイアスがみられた。また、石井・沼崎(2011)は、脅威下における男女に関する潜在的態度の内容として、一般的潜在的態度とステレオタイプと関連した潜在的態度を

考慮し(Wittenbrink, Judd, & Park, 1997, 2001)、それらのうちいずれの内集団バイアスが生じるかを検討している。一般的潜在的態度の内集団バイアスとは、内外集団に対してステレオタイプとは関連のない一般的なポジティブ評価概念やネガティブ評価概念(良い、悪い)を結びつけることをさす。特にここでは男性に一般的なポジティブ評価概念を結びつけ(男性は良い)、女性に一般的なネガティブ評価概念を結びつけることをさす(女性は悪い)。対して、ステレオタイプと関連した潜在的態度の内集団バイアスの本研究での定義は、内集団に対して内集団ステレオタイプに関連したポジティブ評価概念を結びつけ(e.g., 男性は有能)、外集団に対して外集団ステレオタイプに関連したネガティブ評価概念を結びつけることをさす(e.g., 女性はうるさい)。一般的潜在的態度もステレオタイプと関連した潜在的態度もともに潜在的態度であることには変わりないが、内集団バイアスの現れかたが異なることがいくつかの研究で示されている。例えば内集団バイアスはステレオタイプに関連付けた潜在的態度のほうが一般的潜在的態度と比べて強く表れやすいことが示されている(石井・沼崎, 2009; Wittenbrink et al., 1997, 2001)。特に男女に関する潜在的態度として、石井・沼崎(2009)は、男性は脅威を受けていない場合には、ステレオタイプと関連付けた潜在的態度においては内集団バイアスをみせるが、一般的潜在的態度としては内集団バイアスをみせないことを示している。石井・沼崎(2011)は、こうした 2 つの潜在的態度の内集団バイアスのタイプについて考慮し、脅威下ではステレオタイプと関連した潜在的態度と一般的潜在的態度の両方において内集団バイアスが強まることを示している。これらをまとめると、自己価値の脅威下におかれた男性において、男性とポジティブ評価概念を結びつけ、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的態度の内集団バイアスが生じ、かつそれはステレオタイプの関連の有無に関わらず生じるということになる。

それでは、脅威下におかれた男性において、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じると言っていいのだろうか。石井・沼崎(2011)の結果では、必ずしもそれを断言はできない。それは石井・沼崎(2011)が、IAT を用いて潜在的偏見を測定したことが関わっている。IAT は、概念間の連合を測定する測度であるが、単一の対象に対する態度ではなく、2 つの対象への態度の相対的な差を測定する測度である。IAT では、①男性関連語とポジティブ語、女性関連語とネガティブ語を同キーで判断させるブロック(男性ポジティブ・ブロック)と、②女性関連語とポジティブ語、男性関連語とネガティブ語を同キーで判断させるブロック(女性ポジティブ・ブロック)の 2 つのブロックのそれぞれの反応時間を測定し、その平均反応時間の差から男女に関する潜在的態度の強さを算出する。そして、もし男性ポジティブ・ブロックのほうが女性ポジティブ・ブロックよりも反応時間が速かったならば、その人は男性とポジティブ評価概念を結びつけ、女性とネガティブ評価概念を非意識的に結びつけたということになる。IAT において注意すべき点は、男性と女性それぞれに対する個々の潜在的態度が測定できるわけではなく、男性への態度と女性への態度の相対的な差として男女に関する潜在的態度が測定されるという点である。すなわち IAT によって男女に関する潜在的態度を測定した場合には、男性と女性のそれぞれの態度が混入していることになり、いずれの対象への態度が反映されているかはわからないのである。

このように IAT を用いた研究では、男女に関する潜在的態度に内集団バイアスが生じたからといって、必ずしも女性に対する否定的な態度が強まっているとはいえない。Brewer(1999)は内集団バイアスの成分には、内集団に対する好意的態度と外集団に対する敵意的な否定的態度があり、それぞれは独立に生じ得ることを指摘している。つまり、態度に内集団バイアスが生じたときには、外集団に対して否定的な態度が生じたとも考えられるし、内集団に好意的な態度が生じたとも考えられ、必ずしも両方が生じているとは限らないのである。石井・沼崎(2011)において示された内集団バイアスも, 女性に対してネガティブ評価概念を結びつけたため生じたのではなく、男性に対してポジティブ評価概念を結びつけたため生じたのかもしれない。

自己価値への脅威が生じたときに、女性という単一の対象概念に対してネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じるのだろうか。このことを明確に示すためには、男性に対する潜在的態度を反映しない形で、女性に対する潜在的態度を測定する必要がある。

本研究の概要

本研究は女性という単一の態度対象への潜在的偏見に注目し、自己価値への脅威状況におかれた男性が、非意識的に女性とネガティブ評価概念を結びつけるかを検討した。男性への潜在的態度を反映しない形で、女性への潜在的偏見を測定するために、単一の対象への態度を測定する測度であるシングルカテゴリ IAT(Karpinski & Steinman, 2006: 以下 SC-IAT と略記)を用いた。SC-IAT は基本的な手続きとしては IAT とほぼ同じであるが、態度対象に関する判断は IAT のように 2 つではなく(男性、女性)、1 つのみである(女性)。IAT は、2 つの態度対象への判断を行わせることで、1 つの対象に対する評価概念の結びつきではなく、2 つの対象に関する評価概念の結びつきの相対的な差を測定していたが、SC-IAT は 1 つの対象に対する評価概念の結び

つきを測定することを目的とする。Karpinski & Steinman(2006)は、SC-IAT のような単一の対象への判断のみを行う IAT についての信頼性と妥当性を検討しており、こうした手続きで単一の態度対象に対する評価概念の結びつきが測定できることを確認している。具体的には、参加者に①ポジティブ語を F キー、女性関連語とネガティブ語を J キーで判断させるブロック(女性ネガティブ・ブロック)と、②女性関連語とポジティブ語を F キー、ネガティブ語を J キーで判断させるブロック(女性ポジティブ・ブロック)という 2 つの課題を行わせる。本研究では、女性ポジティブ・ブロックよりも女性ネガティブ・ブロックのほうで反応時間が速くなることを、女性に対する潜在的偏見の表れとした。

本研究では、このように測定される女性に対する潜在的偏見が、脅威下において増加するかを検討した。自己価値への脅威は、テストのネガティブな結果のフィードバックを与えることによって操作した。具体的には、参加者に対人的な特性と仕事に関する能力を測定するとされるテストを受けさせ、それらについてのネガティブな結果のフィードバックを与えるか否かによって操作した。

本研究は、脅威による潜在的偏見への影響の調整要因として、顕在的自尊心の高さの個人差を考慮した。顕在的自尊心の高い人はポジティブな自己イメージの一貫性を保つために自己を脅かす情報に敏感に反応しやすいことが指摘されている(Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Crocker & Park, 2004)。この議論と関連し、少なくとも偏見研究においては、顕在的自尊心が高い場合に、脅威による影響を受けやすいことが示されている。Crocker et al.(1987)は、ネガティブ・フィードバックを受けた後の顕在的偏見に顕在的自尊心の高さによる違いがあるかを検討しており、自尊心の高い参加者においては、ネガティブ・フィードバックを受けることで顕在的態度の内集団バイアスが強まるが、自尊心の低い参加者においては強まらないことを示している。このように先行研究では、顕在的自尊心の高さが脅威下における顕在的偏見の増加と関わることを示している。本研究は、潜在的偏見についても、顕在的偏見への影響と同様な、顕在的自尊心による調整効果が生じるかを検討した。仮説として、顕在的自尊心の高い人は、顕在的自尊心の低い人と比べて、ネガティブ・フィードバックよる潜在的偏見の増加効果がより強いことを予測した。

また、女性に対する潜在的偏見を測定するにあたり、石井・沼崎(2011)と同様に、一般的潜在的偏見と潜在的ステレオタイプ的偏見という潜在的偏見のタイプについても考慮した。ここでの定義として、一般的潜在的態度は、女性と女性ステレオタイプと関連しないネガティブ評価概念とを結びつけることであり、潜在的ステレオタイプ的偏見は、女性と女性ステレオタイプに関連したネガティブ評価概念とを結びつけることである。こうした 2 つのタイプを区別して測定するために、石井・沼崎(2011)と同様に、判断するカテゴリ・ラベルは同じだが、異なる刺激項目を用いた 2 つの SC-IAT を使用した。IAT では、判断するカテゴリ・ラベルが同じであっても呈示される刺激の性質が異なる場合には、異なる連合が測定されることが指摘されている(詳細なプロセスについては、Govorun & Williams, 2004; 石井・沼崎, 2009)。例えば石井・沼崎(2009)は、ジェンダー態度 IAT において、ネガティブ刺激項目として女性のステレオタイプに関連した刺激項目が呈示された場合、女性と一般的なネガティブ評価概念との結びつきではなく、女性とステレオタイプに関連したネガティブ評価概念との結びつきが測定されるとしている。本研究では、女性のステレオタイプと関連しないネガティブ語を刺激として用いることで女性への一般的潜在的偏見を測定する SC-IAT(一般的偏見 SC-IAT)と、ステレオタイプと関連したネガティブ語を刺激として用いることで女性への潜在的ステレオタイプ的偏見を測定する SC-IAT(ステレオタイプ的偏見 SC-IAT)の 2 つを用意し、脅威による影響の違いが現れるかを検討した。

本研究の仮説は以下のとおりである。ネガティブ・フィードバックを受けた男性において、フィードバックを受けていない男性よりも、女性に対する潜在的偏見が強くみられるだろう。このフィードバックによる潜在的偏見への影響は、顕在的自尊心の高さによって調整を受け、自尊心の高い男性においてより強くみられるだろう。また、潜在的態度のタイプの違いに関して、全体的な傾向としては一般的偏見 SC-IAT よりもステレオタイプ的偏見 SC-IAT のほうが潜在的偏見は強くみられるが、石井・沼崎(2011)と同様に、脅威を受けることによる影響については、SC-IAT タイプによる違いはみられないことを予測した。

方法

実験参加者　首都大学東京または東京都立大学の男子大学生 39 名が実験に参加した。回答に欠損のなかった 37 名を分析の対象とした。参加者にはレポートを提出することにより一般教養科目「心理学」の授業の加点されることを予告していた。参加者には、本実験の約 2 ヶ月前の講義において集団でローゼンバーグの自尊心尺度の日本語版(星野, 1970)に回答させ、顕在的自尊心の個人差を測定していた($M = 2.79$, $SD = .71$)。参加者を、フィードバックなし条件、フィードバックあり条件にランダムに割り当てた。

装置　実験に使用した装置は、TOSHIBA 製のノート PC、dynabook AX/650LS であった。実験手続きに関す

る制御には Millisecond Software 社の Inquisit を用いた。

刺激項目 SC-IAT においては、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語という 5 タイプの文字刺激項目を使用した。すべての刺激は、石井・沼崎(2011)で用いられた刺激と同じであった[2)]。女性名には、本試行用の項目として、ようこ、はるか、あゆみ、さちこ、ゆうこ、の 5 語を用いた。ポジティブ語には、輝かしい、元気、笑い、見事な、平和、の 5 語、ネガティブ語には、痛ましい、ひどい、恐ろしい、苦悩、失敗、の 5 語、男性関連ポジティブ語には、有能、決断力のある、自信のある、指導力のある、勇敢な、の 5 語、女性関連ネガティブ語には、うるさい、うわさ好き、でしゃばり、おせっかい、おしゃべり、の 5 語を用いた。

SC-IAT タイプ SC-IAT には 2 タイプあり(一般的偏見 SC-IAT、ステレオタイプ的偏見 SC-IAT)、判断するカテゴリ・ラベルと実施の手順は同じだが、用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。一般的偏見 SC-IAT では、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語を刺激項目として用いた。ステレオタイプ的偏見 SC-IAT では、女性名、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語を用いた。

手続き 実験は 1 人ずつ個別に行った。まず、実験の参加承諾に関する説明を受けた後に実験の説明に入った。性格検査と思考能力テストを検討する実験と、認知判断に関連する実験の 2 つを行うと説明した。

脅威の操作 本実験の操作および手続きは、石井・沼崎(2011)とほぼ同様に行った。まず、PC 上で性格検査と思考能力テストという 2 つのテストを行った。性格検査は、文章を呈示し、5 件法での回答を求めるものであり、一方で、思考能力テストは、図形に関する判断を求めるものであった。思考能力テストについては、条件ごとに難易度は異なっており、フィードバックなし条件では、参加者は、難易度の易しい問題を、比較的長時間をかけて行うことができたが(1 問ごとの制限時間を 30 秒)、フィードバックあり条件では、難易度の高い問題を、短い時間で解かなければならなかった(1 問ごとの制限時間を 10 秒)。

2 つのテストが終了した後、「性格検査は対人的な特性、思考能力テストは仕事に関連した特性を測定しており、これらは将来の成功に関連する」とテストで測定される特性についての概説を行った。これは自己にとって重要な特性が測定されるという認識を促すためのものであった。その説明が終わった後、結果のフィードバックの操作を行った。フィードバックあり条件の参加者には、PC の画面上に 2 つのテストの成績を表示することでフィードバックした。表示された結果は偽のネガティブな結果であり、E 評価(A～F の間の評価で下から 2 番目)であり、これまでテストを受けた男性大学生「110 人中 85 位～104 位」に位置するというものであった。対して、フィードバックなし条件には、成績は次の実験後に返すと説明し、フィードバックを行わなかった。フィードバックに関する操作を行った後に、1 つ目の実験は終わりと告げた。

SC-IAT の実施 SC-IAT を実施する直前に、自身のジェンダーについて顕現化をさせる目的で、簡単な性別のチェックを挿入した。「あなたは男性ですね」という単純な確認の文章を呈示し、はい・いいえで回答させた。

次に、認知判断のテストと称して、SC-IAT を行わせた。参加者に 2 つの SC-IAT を両方行わせた。いずれの参加者にも、ステレオタイプ的偏見 SC-IAT を先に行わせ、次に一般的偏見 SC-IAT を行わせた。SC-IAT は、Karpinski & Steinman(2006)を参考にして作成した。SC-IAT では、画面に単語を呈示し、その単語が指定されたカテゴリのうちどれに含まれるかをキー押しで判断させた。正解の場合にはそのまま課題が続いたが、不正解の場合は画面に“×”が表示された。キー押しをすると、800ms の試行間隔をおいて次の試行となった。ブロックは、①女性ネガティブ・ブロック、②女性ポジティブ・ブロックの 2 ブロックに分かれていた。①と②のブロックのいずれを先に行うかについては、参加者間でカウンター・バランスをとった。

それぞれのブロックで行われた課題は以下のとおりであった。①女性ネガティブ・ブロックでは、女性名・ポジティブ語・ネガティブ語を呈示し、好ましい単語であった場合は「F」キー、好ましくない言葉または女性名だった場合は「J」キーを押すことで判断させた。試行は全部で 72 試行であった。それぞれの単語カテゴリへの反応数が同じだったり、左右のキーに割り当てられる単語の数が均等であったりした場合、反応バイアスが生じる可能性がある。そのため左右のキーに割り当てられる単語の比率を不釣合いにすることで反応バイアスを回避しようとした(Karpinski & Steinman, 2006)。女性ネガティブ・ブロックでは、女性名・ポジティブ語・ネガティブ語の出現比率を、5: 8: 5 とした。②女性ポジティブ・ブロックでは、①と女性名を判断する際のキーの位置を入れ替え、好ましい単語または女性名であった場合は「F」キー、好ましくない言葉の場合は「J」キーを押すことで判断させた。女性名・ポジティブ語・ネガティブ語は、5: 5: 8 の出現比率で呈示した。刺激項目はすべてのブロックにおいてランダムな順序で呈示した。

操作チェックを含む質問項目への回答 2 つの SC-IAT が終了した後、操作チェックおよび、操作の妥当性を確認するためのいくつかの質問項目に回答させた。操作チェック項目は「結果のフィードバックを受けましたか」という項目に 2 段階(1: はい・2: いいえ)で回答を求めるものと、その項目に「はい」と答えた場合に回答する

「フィードバックされた結果はどのようなものでしたか？」という質問への7件法(1: 悪かった～7: よかった)での回答が対応していた。そのほかに、操作の妥当性を確認するため項目として、「思考能力テストはどれくらいできましたか?」(7件法、1: ほとんどできなかった～7: ほとんどできた)といった質問に回答させた。質問紙への回答後、参加者に本当の目的を告げ、デブリーフィングを行った。最後に再度データの使用を承諾するかどうかを確認し、実験を終了した。

結果

操作チェックおよび質問項目　操作チェックのため、脅威状況においてフィードバックされた結果が悪かったと認識されていたかの確認を行った。まず、「結果のフィードバックを受けましたか」という項目には、フィードバックあり条件のすべての参加者が「はい」、フィードバックなし条件のすべての参加者が「いいえ」と回答しており、この設問で「はい」と回答した場合には、フィードバックされた結果を悪かったと評定しており(M = 1.60)、この項目で中点以上をつけた参加者はいなかった。また、この評定と自尊心の高さとの相関関係はみられなかった(r = .06, *ns*)。その他の項目として、「思考能力テストはどれくらいできましたか?」の項目の得点について、自尊心(連続量) × フィードバック(あり vs. なし; 参加者間)を要因とした一般線形モデルを用いた分析をおこなった。その際、自尊心は標準化した値を投入した。フィードバックの主効果のみがみられ($F(1, 33) = 38.60$, $p < .001$)、フィードバックなし条件よりもフィードバックあり条件のほうができていないと答える傾向にあった(Ms = 4.21, 1.61)。これらの結果は脅威の操作の妥当性を示しているといえよう。

潜在的偏見への効果　次に潜在的偏見への効果を検討した。潜在的偏見の指標として、SC-IAT のブロック間の反応の差を示す値である D 値を用いた(Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)。SC-IAT における D 値の算出は、Karpinski & Steinman (2006)に従い次の手順で行った。まず、それぞれのブロックの72試行のうち、始めの 18 試行は練習試行として分析から除外した。300ms 以下、10000ms 以上の反応を外れ値として設定したが、そうした反応はなかったため、すべての反応を分析に用いた。また、誤反応も分析に用いた。次に、②ブロックの平均反応時間から①ブロックの平均反応時間を減算した。その平均反応時間の差を、①、②ブロックをプールした標準偏差で割り、算出された値を女性への否定的態度を示す D 値とした[3]。この D 値が大きいほど、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が強いことになる。

D 値を従属変数として、自尊心 × フィードバック × SC-IAT タイプを要因とした一般線形モデルを用いた分析を行った。また、有意な効果がみられた場合には、それぞれの期待値に対して 0 からの t 検定を行い、有意な潜在的偏見の効果がみられるかを示した。まず SC-IAT タイプの主効果がみられ($F(1, 33) = 21.91$, $p < .001$)、全体的な傾向として一般的偏見SC-IATよりも($M = -.14$, $t(33) = -2.55$, $p < .05$)、ステレオタイプ的偏見 SC-IAT のほうが潜在的偏見が強くみられた($M = .28$, $t(33) = 3.91$, $p < .001$)。この効果は、女性とネガティブ評価概念を結びつける傾向は、一般的潜在的偏見よりもステレオタイプ的偏見のほうが強いことを示している。

自己価値への脅威が関わる効果として自尊心 × フィードバックの交互作用効果が有意であった($F(1, 33) = 5.17$, $p < .05$)。この結果を詳しくみるため、自尊心が高い場合と低い場合それぞれに分けて、フィードバックなし条件とフィードバックあり条件の D 値の期待値を算出した。期待値の算出にあたり、自尊心が高い場合は自尊心が

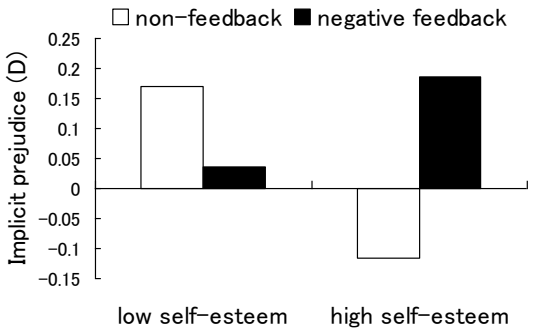

Figure 1 Implicit prejudice to women as a function of feedback and trait self-esteem (low self-esteem: - 1SD, high self-esteem: 1SD). Implicit prejudice to women means the association between women and negative attributes.

1SD の期待値、自尊心が低い場合は - 1SD の期待値を用いた。Figure 1 には D 値の期待値を示した。また、自尊心の水準によってフィードバックによる効果が異なるかをみるために、一般的偏見 SC-IAT とステレオタイプ的偏見 SC-IAT の D 値を平均化した値を算出し、Simple Slope 検定によって、自尊心の高い参加者(1SD)と低い参加者(- 1SD)それぞれにおけるフィードバックの効果を検定した。また、この分析についても有意な効果がみられた場合には、それぞれの期待値に対して 0 からの t 検定を行い、有意な潜在的偏見の効果がみられるかを示した。すると、自尊心の低い参加者においてはフィードバックなし条件 ($M = .17$, $t(33) = 1.73$, $p = .09$) とフィードバックあり条件 ($M = .04$, $t(33) = .04$, *ns*) との間に有意な差はみられなかったが ($t(33) = -1.00$, *ns*)、そ

れに対して、自尊心の高い参加者においては、フィードバックによる効果がみられ、フィードバックなし条件（ M = -.12, t (33) = - 1.18, *ns*）よりもフィードバックあり条件（M= .19, t (33) = 2.05, p < .05）のほうが D 値が大きかった（t (33) = 2.27, p < .05）。また、それぞれのフィードバック条件ごとに自尊心 × SC-IAT タイプを要因とした一般線形モデルを用いた分析をおこない、自尊心の高さによる効果を検定したところ、各フィードバック条件において自尊心による有意な効果はみられなかった(脅威あり条件: F (1, 17) = 2.48, *ns*; 脅威なし条件: F (1, 16) = 3.36, *ns*)。また、フィードバックと関連した効果に、SC-IAT タイプによる調整効果はみられなかった(Fs < 1)。

考察

本研究は、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性という単一の対象にネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じるかを検討するものであった。結果として、顕在的自尊心の高い男性において、ネガティブ・フィードバックを受けた場合に、ネガティブ評価概念を結びつける女性に対する潜在的偏見が生じるが、顕在的自尊心の低い男性においてはそうした影響が生じないことが示された。この結果は、少なくとも顕在的自尊心の高い男性において、自己価値への脅威が女性への潜在的偏見を生じさせることを示している。顕在的自尊心の高い男性は、肯定的な自己イメージを強くもつために、ネガティブ・フィードバックによって自己イメージが脅かされたと感じやすく、そのため自己価値を防衛する反応として外集団をより否定的に評価したことが考えられる。先行研究では、顕在的自尊心の高い人は、脅威下におかれたときに、顕在的態度における内集団バイアスを生じさせることが示されてきた(Crocker et al., 1987)。特に本研究の結果は、そうした影響が顕在的偏見だけではなく、潜在的偏見においても生じることを示している。一方で、顕在的自尊心の低い男性は、もともと自己イメージを低く認知しているために、ネガティブ・フィードバックを受けても自己価値への脅威と感じにくく、自己防衛のための反応としての潜在的偏見が生じにくかったのだと考えられる[4)]。

本研究の結果は、石井・沼崎(2011)においては明確ではなかった、女性に対する潜在的偏見が脅威下では強まることを明らかにしたといえる。特に重要な結果は、顕在的自尊心の高い男性は、脅威にさらされていないときには、女性に対する潜在的偏見をみせなかったが、自己価値への脅威下においては、女性に対する潜在的偏見をみせるようになっていたことである。これは、通常では女性に対する潜在的偏見が生じていなくても、自己価値への脅威下ではそれが強く生じ得ることを示している。先行研究ではマイノリティ外集団のような、もともと潜在的偏見が強くもたれる外集団に対して、自己価値への脅威下においてはより強い潜在的偏見がもたれることが示されてきたが、この結果から、それほど潜在的偏見がもたれていない外集団に対しても、脅威下では潜在的偏見がもたれ得ることが示唆される。

脅威による効果には、石井・沼崎(2011)と同様に、潜在的偏見と潜在的ステレオタイプ的偏見の違いはみられなかった。すなわち、脅威による潜在的偏見への影響は、女性と一般的なネガティブ評価概念との結びつきと、女性とステレオタイプと関連したネガティブ評価概念との結びつきとで異ならなかった。このことから脅威にさらされた男性において、女性と一般的なネガティブ評価概念の結びつきと、ステレオタイプ的なネガティブ評価概念との結びつきという両方の潜在的偏見が強まることが考えられる。ただしこの効果については、本研究の手続き的な点から別の説明可能性も考えられる。それは、常にステレオタイプ的偏見 SC-IAT を先に行い、一般的偏見 SC-IAT を後に行ったことによって、脅威によって潜在的ステレオタイプ的偏見が生じ、そのことが一般的潜在的偏見の増加につながった可能性である。石井・沼崎(2011)では、順序のカウンター・バランスをとっているため、この可能性は低いものの、否定はできないため、測定の順序を入れ替えることによって検討する必要があるだろう。

今後の方向性

本研究は男性の女性に対する潜在的偏見を取りあげることで、もともと潜在的偏見がもたれない外集団に対しても、脅威下においては潜在的偏見がもたれ得ることを議論した。女性には好意的なステレオタイプがもたれる側面もあるが、キャリア場面などにおいて、偏見や差別的処遇を向けられ否定的に評価され得る面もある。そうしたネガティブな側面も女性にはあるために、男性において女性に対する偏見が生じやすかった可能性はある。脅威下において潜在的偏見が生じる現象が、一般的に生じるかを確かめるためには、他のさまざまな集団関係も取り上げ、適用可能性を検討する必要があろう。

また本研究は、自己価値への脅威にさらされた男性において、女性に対する潜在的偏見が生じることを示した。逆に、女性が自己価値への脅威にさらされたときにも、男性に対する潜在的偏見が生じる可能性がある。ただし、現代においても残る男尊女卑という価値観から、男性のほうが女性よりも、異性を否定的に評価することで自己高揚感を覚えやすく、偏見を自己高揚方略としても用いやすいのかもしれない。今後の研究では、脅威下における自己高揚方略の男女差について検討すべきだろう。

本研究は、外集団である女性に対する潜在的偏見に

注目したが、脅威は内集団である男性に対する潜在的態度にも影響を与える可能性がある。これまでの研究で、自己価値への脅威が内集団に対する好意的な潜在的態度を生じさせるかどうかについてはほとんど検討されていない。今後は、男性が脅威下において男性への潜在的態度を強めるのかについて検討することで、脅威と内集団バイアスとの関わりをより明確にしていくべきであろう。

脅威によって生じた潜在的偏見が、どのように顕在的な偏見や差別的行動に影響を与えるかは検討すべきだろう。Sinclair & Kunda(2000)は、女性に対する顕在的態度が、自己価値への脅威下において否定的となることを示している。特に女性に対する顕在的偏見や差別的行動は、アンビバレントで微妙な形態をもつことが多い(Glick & Fiske, 1996, 2001)。今後は潜在的偏見と顕在的偏見の両方を測定することで、その関係性について明らかにしていく必要があるだろう。

本研究は、顕在的自尊心の高さについて考慮し、高い顕在的自尊心をもつ場合に、脅威を受けることで潜在的偏見が生じることを示した。しかし、高い顕在的自尊心をもつ人の中でも、潜在的自尊心の傾向が異なれば、脅威による影響が異なる可能性が指摘されている(Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; Jordan, Spencer, & Zanna, 2005)。潜在的自尊心とは、非意識的に自己とポジティブさを結びつける傾向のことをさす(Greenwald & Banaji, 1995)。Jordan et al.(2005)は、顕在的自尊心は高いが潜在的自尊心が低い場合には、脅威によって外集団に対する差別行動が生じるが、顕在的自尊心と潜在的自尊心がともに高かった場合は、脅威にさらされたとしても差別行動が生じないことを示している。こうした潜在的自尊心と顕在的自尊心の効果は、潜在的偏見にも影響を及ぼす可能性がある。今後の研究においては、顕在的自尊心のみではなく、潜在的自尊心の高さも考慮することによって、人が脅威に対してどのように対処するのかについての、詳細な検討をする必要があるだろう。

引用文献

Amodio, D. M., & Devine, P. G. (2006). Stereotyping and evaluation in implicit race bias: Evidence for independent constructs and unique effects on behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 652-661.

Bargh, J. A., Chaiken, S., Govender, R., & Pratto, F. (1992). The generality of the automatic attitude activation effect. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 893-912.

Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Muraven, M., & Tice, D. M. (1998). Ego depletion: Is the active self a limited resource? *Journal of Personality and Social Psychology,* **74**, 1252-1265.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.

Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429-444.

Crocker, J., & Park, L. E. (2004). The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, **130**, 392-414.

Crocker, J., Thompson, L. L., McGraw, K. M., & Ingerman, C. (1987). Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 907-916.

Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.

Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (Eds.) (1986). Prejudice, discrimination, and racism. New York: Academic Press.

Fazio, R. H., Sanbonmatsu, D. M., Powell, M. C., & Kardes, F. R. (1986). On the automatic activation of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 229-238.

Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2003). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception. In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium*. Vol. 9. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 21-44.

Fein, S., & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33. Thousand Oaks, CA: Academic Press. pp. 115-188.

Govorun, C. L., & Williams, K. D. (2004). Changing the affective valence of the stimulus items influences the IAT by re-defining the category labels. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 357-365.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

Greenwald, A. G, Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.

星野　命 (1970). 感情の心理と教育　児童心理, **24**, 1445-1477.
Inquisit 2.0.61004.3 [Computer software]. (2006). Seattle, WA: Millisecond Software.
石井国雄・沼崎　誠 (2009). ジェンダー態度IATにおけるステレオタイプ的な刺激項目の影響　社会心理学研究, **25**, 53-60.
石井国雄 ・沼崎　誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響　社会心理学研究, **27**, 24-30.
Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to racial discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 693-702.
Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
Jost, J. T., Pelham, B. W., & Carvallo, M. (2002). Non-conscious forms of system justification: Cognitive, affective, and behavioral preferences for higher status groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 586-602.
Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 16-32.
Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Harvesting implicit group attitudes and beliefs from a demonstration website. *Group Dynamics*, **6**, 101-115.
Petty, R. E., Fazio, R. H., & Briñol, P. (Eds.). (2009). *Attitudes: Insights from the new implicit measures*. New York: Psychology Press.
Rudman, L. A., & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic ingroup bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 494-509.
Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 885-904.
Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 1329-1342.
Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1139-1152.
Taylor, S. E., & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, **96**, 569-575.
Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 262-274.
Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (2001). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37,** 244-252.

註

1) 本研究は平成 18 年度に東京都立大学大学院人文科学研究科に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。本研究は科学研究費補助金の補助を受けた(基礎研究(C) 課題番号 19530559)。成果の一部は、The 9th annual meeting of Society for Personality and Social Psychology において発表した。

2) 単語の感情価については、石井・沼崎(2009)において、一般的好ましさの調査が行われており(7 件法、1: 非常に好ましくない～7: 非常に好ましい)、ポジティブ語($M = 5.90$)、ネガティブ語($M = 2.33$)、男性関連ポジティブ語($M = 5.60$)、女性関連ネガティブ語($M = 2.70$)であった。また石井・沼崎(2011)は、これらの語の男女との関連性についても、男性 10 名を対象に調査を行った(7 件法、1: 男性に関連する～7: 女性に関連する)。一要因四水準の ANOVA の結果、有意な差が得られた($F(3, 27) = 37.56$, $p < .001$)。Bonferroni の検定により、女性関連ネガティブ語($M = 5.50$)と 3 つの単語カテゴリの評定値を比較したところ、ポジティブ語($M = 3.94$, $p < .001$)、ネガティブ語($M = 3.90$, $p < .001$)、男性関連ポジティブ語($M = 2.92$, $p < .001$)のすべての単語カテゴリとの間に差がみられ、最も女性と関連すると評定された。また男性関連ポジティブ語は、ポジティブ語($p < .05$)と差がみられ、ネガティブ語($p < .10$)とも有意に近い差がみられ、より男性と関連する単語として評定された。ポジティブ語とネガティブ語との間に有意な差はみられなかった。

3) IAT 得点は一般に一致ブロックと不一致ブロックの反応潜時の差から算出されるが、反応潜時は個人差によって影響を受けやすい。そのため、D 値では個人差の変動を調整するために、反応潜時の差を全体の標準偏差で割る(詳細は、Greenwald et al., 2003)

4) 本研究はフィードバックの操作として、課題の難易度を変えるという方法も用いた。このため、フィードバックあり条件で困難な課題をしたことによって制御資源枯渇(Baumeister, Bratslavsky, Muraven, & Tice, 1998)が生じ、潜在的偏見が強まった可能性も考えられよう。ただし、いくつかの理由でこの可能性は低いと考えられる。まず、制御資源枯渇が生じた場合には、あらかじめ顕著であった反応がより顕著となると考えられることである。もし、もともとあった潜在的偏見がより顕著にみられるようになったならばそうした可能性は考えられる。

しかし、自尊心高条件の結果のパターンをみると、フィードバックなし条件では潜在的偏見はみられず，かつ有意ではないものの数値的には負の値というポジティブな潜在的態度がみられた。そしてフィードバックあり条件においては、そうした傾向から一転して、潜在的偏見が強くみられるようになった。すなわち、もともとみられなかった自動的反応が、操作によって生じるようになった。こうしたように、もともとの反応とはベイレンスの異なる反応が生じたため、制御資源枯渇とは異なる要因による影響と考えられる。また、自尊心の調整効果があることからも、制御資源の枯渇による影響とは考えにくい。

The effects of threat to self-worth on implicit prejudice of men toward women

Kunio ISHII (*Graduate School of Human Sciences, Tokyo Metropolitan University*)
Makoto NUMAZAKI (*Graduate School of Human Sciences, Tokyo Metropolitan University*)

The present study investigated whether men who perceived a threat to their self-worth would show a stronger implicit prejudice toward women. Male participants, who had completed the Rosenberg Self-Esteem Scale previously, either received a negative feedback on their intelligence and personality in the initial tests or did not receive such a feedback. Subsequently, they completed a single-category IAT (Karpinski & Steinman, 2006) that measured implicit prejudice toward women. We found that male participants with a high explicit self-esteem showed a stronger implicit prejudice in the negative feedback condition than those in the non-feedback condition did. This result suggests that when faced with a threat to self-worth, men may attempt to restore it by devaluing and derogating women.

Keywords: implicit prejudice, prejudice toward women, threat to self-worth, explicit self-esteem, single category IAT.